

第3 学習指導の重点

1 本年度の達成目標

- (1) 時代の要請に応える教育を展開するに際して、生徒が自ら進んで学習することによって学ぶ喜びを体得しつつ、生涯にわたって学習し続ける基礎学力を身につけ、一人一人の個性を伸長させることが可能となるよう、学習教材の整備や指導方法の工夫改善に努め、充実した授業を実施する。
- (2) 生徒の学習意欲の一層の伸長に努め、生徒自らが興味をもって学習に取り組む雰囲気を作るため、各教科ごとに種々の研究会・研修討論会等を設け、生徒の実態を把握し、共通理解を深めて教育効果をあげることに努める。
- (3) 各教科ともに授業に最大の勢力を傾注し、密度の高い更に効果がある授業を教員・生徒の双方で求める努力をする。
- (4) 生徒が興味を持って、主体的に参加する授業を実現するため、研究授業・校内研修を通して学習指導方法を実践的に研究する。
- (5) 放課後に、学習到達度の低い生徒に対する指導並びに余力ある生徒の学力伸長のための指導等、生徒の能力・適性・意欲に応じた綿密な指導を行う。
- (6) 生徒が喜びと希望をもって日々の授業を受けるように、教員はたえず研修に励み、指導に工夫と吟味を加えつつ、更に、教員相互の連繫を密にして、学校一体となって教育の質の向上を図る。

国 語 科

- (1) 自主的な学習態度や習慣を涵養し、読書習慣をつけるとともに、基礎学力の充実を図る。
- (2) 生徒の興味関心を通して、学習に対する自律的姿勢や意欲の喚起に注意する。
- (3) 楽しく学ぶ中で人間味ある豊かでうるおいのある知性の体得を目指すように指導する。
- (4) 教科教材を通じて、人間としてあるべき生き方や問題に着目させる。
- (5) 「古典」に親しみを持つよう、その扱いに工夫を加え、読解のための基礎的・基本的事項の把握に留意し、創意ある指導をするよう努める。
- (6) 学習到達度の低い生徒については最低学習到達目標を設定し、目標到達のための指導に努める。

地歴・公民科

3年では、地理3単位を共通履修させた上で、日本史4単位、及び倫理、政治・経済、日本史演習、世界史演習、地理演習各2単位のうちから必要なものを選択させ、2年では世界史4単位、1年では現代社会4単位を履修させる。

生徒の実態に即し、その能力・関心に応じた、しかも毎回生徒の関心と興味をひきおこし、学習の意欲と喜びをもつような授業を目指す。特に学習到達度の低い生徒については、きめ細かい指導に努める。そのために日々教材研究に努め、さらに綿密かつ合理的な授業計画を立てるよう心がけたい。具体的には次の諸点に留意する。(1) 広く世界的な視野から社会における諸問題を正しく理解・判断できる能力を養う。

(2)現在の社会及び未来の社会のあるべき姿を想定し、その実現のために役立つ学習であるよう心がける。

「現代社会」 二次以降から学ぶ地歴・公民科選択科目の基礎的役割をはたすとともに、現代社会を科学的かつ体系的に認識できる力を身につけさせたい。

「世界史」 社会科教育の一環としての世界史においては日本国民の主体的な歴史認識・世界史認識を目標とし、授業時においては、特に生徒の自主的学習を促しながら、広範な基本的知識の学習と総合的な問題を把握するための方策も併せて研究する。

「日本史」 個々の歴史的事実を正確に理解し、さらに全体の流れの中に位置づけて理解するように指導する。その際特に留意したい点は、常に現在の社会及び未来の社会のあるべき姿を想定し、その実現のために役立つ歴史の学習としたい。

「地理」 世界的な広い視野から社会における諸問題を正しく理解、判断し、人間性豊かな社会生活を送るための必要な知識・技術を養う。この目標達成のため、次の事項に留意する。

地域社会をその自然環境や社会環境とともに理解し、地域的な社会問題に関心をもたせる。世界的な視野からみた正しい問題把握ができるよう努める。

問題を正しく客観的に理解するため、地理の教科の中で、地図、統計などの活用を図る。

広く地域社会の理解を深め、それぞれの地域が、そこに住む人々と環境とのつながりによって歴史をなりたたせていることを知り、人種、民族に対する偏見をもたせないようにする。

正しい国際社会の理解が世界の恒久平和につながることを考え、地球上から貧困と飢餓をなくすにはどうしたらいいか、あやまった方法による資源の獲得と利用が地球の破滅に至ることを強調する。

「政治経済」

日本の社会体制や社会機構についての基礎的・体系的な学習を通して、日本の状況を正しく把握できるようにする。

国際政治、国際経済との関連の中で、日本の占める位置を認識させ、今後の日本を展望させたい。

以上の学習から、政治や経済に関心を持たせ、批判的かつ健全な民主主義の精神を身につけさせたい。

「倫理」 先哲の思想を軸にしながら、人間とは何か、いかに生きるべきかを考え、人間らしい生き方についても探求する。

「日本史演習」、「世界史演習」、「地理演習」 受験を意識しつつ、より幅広い知識を身につけさせる。また、特定のテーマを取り上げ、学習の面白さを理解させる。

数 学 科

数学は人間の知性が最も自由に発揮できる活力に満ちた学問であり、現代の科学技術の基礎を支えている学問である。情報化社会がますます進展していく現代社会においては、どの時代におけるよりも、また、どの分野で活躍する人にとっても数学的要素が切実に求められるようになっている。

数学科では、まず数学への興味と自信をもたせることに努め、すべての生徒が数学を学習することを通して論理的な思考力、本質を把握する力、明快な表現力を身につけられるよう指導する。

- (1) 予習、復習の習慣をつけさせる。
- (2) 時間の許す限り、平易な練習、演習をさせ、懇切な説明を加える。
- (3) 特に学習到達度の低い生徒に対しては放課後を利用して質問、誘導等極力納得のゆく指導のもとに目標達成へのおちこぼれがない指導に努める。
- (4) さらに生徒個々が能力をできる限り伸長できるよう、授業の演習、添削により変化をもたせて目標をより高める授業に努力を払いたい。
- (5) 特に、数学（2単位）は、今年度2クラス3展開の授業形態とし、少人数の利点を生かしたきめ細やかな指導を行い、個々の生徒の到達度の向上をめざす。
- (6) 進路希望に応じて適宜講習を実施する。

理 科

自然の事物・現象への関心を高め、それを科学的に探求させることによって、科学的に考察し、処理的能力と態度を養うとともに、自然と人間生活との関係を認識させる。

物 理

一斉授業による全体学習にとどまらず、生徒実験でのグループ学習や、実験レポート、問題演習等の提出物の点検、講評・質疑応答など、個別学習にも一層力を入れたい。特に計算力の養成に留意する。

自然科学の根底に位置し美しく体系付けられている物理の領域を構造的に理解させるため、授業展開に留意する。

各単位ごとに学ぶべき目標を明確にし、それらを有機的に関連させ一部に拘泥することなく、全体像の把握に努める。

実験を精選させた自然として生徒に提供し、自ら探求し創造させる方向を探りたい。なお、データ検索にはコンピュータを使わせたい。

実験レポートで表現力の養成と、誤差のバールを見通して法則にまとめ上げる過程を大切にするとともに、有効数字、ディメンション、文字計算等に注意を喚起したい。

物理の世界で苦勞を重ねてきた人々の創意工夫と努力に触れ興味の持てる科目にしたい。

学習到達度の低い生徒に対しては、1、2学期の定期考査の結果を元にして放課後等に補講、再テストなどを行い意欲を喚起する。

化 学

自然現象を化学的な視点でとらえ、物質の粒子性とその変化を学ばせる。

実験・観察を重視し、体験的に理解させるとともに、探求する態度を養う。

物質の取扱い、公害に対する認識を深める。

物理・生物・地学の分野との関連性に気付かせ、総合的、科学的な自然観を養う。

生 物

年間授業計画表により、単位時間数の確保と質の向上を図る。

(ア) 実験観察が十分にできるように、設備、器具、薬品等の充実を図る。

(イ) 実験材料は入手し易いように、設備、器具、薬品等の充実を図る。

(ウ) 栽培園（学習に関する色々な種類の樹木、草花を植える）等を整備する。

実験・観察を重視し、実物に接する機会をふやすことにより授業を理解しやすくする。

地 学

地球内外で現在起こっているいろいろな自然現象、ならびに宇宙誕生以来約 150 億年の間に起こったさまざまな自然現象を学習し、歴史科学としての立場を明らかにする。

学習にあたっては、事項・数値などをいたずらに暗記する態度ではなく、自然現象の原因とその結果の関連性を総合的に追及していく。また人間の地球環境に及ぼす影響も考える。

自然に対する親しみと興味を抱かせるよう配慮するとともに、他教科、他科目との関連に留意する。

保健体育科

- (1) 各学年の技能、体力、特性を把握した上で種目計画を決め、種目に応じたウォーミングアップ、補強運動を実施しながら学習効果を上げるとともに、学年により、体カトレーニング等を取り入れ体力増強に努める。
- (2) 授業に積極的に取組み学習効果を上げる。方法として種目によってグループ（班又はチーム）に分け、お互いに協力しながら全体のレベルアップを図るために班別指導を取り入れる。
- (3) 種目のはじめにその目的、指導内容を十分理解させ、各種目についてのプリントを配布したり、必要に応じてテレビ・ビデオ（V.T.R）等の視聴覚教材を使用する。
- (4) 日頃から生徒の健康状態に留意し、体調を乱した生徒を掌握して指導し、極力授業での欠席・見学をなくして健康管理をうながす。
- (5) 健康を保持増進するために、健康に対する考え方や、心身の健康増進や安全を守るための知識と方法を学ばせ、自らすすんで適切な生活行動を実践していく態度や習慣を身に付けさせる。

芸 術 科

音 楽

リズム感や読譜力をつけることに努める。

伸びやかな声で歌えるように努める。

合唱の喜びを感得させる。

ギター及びリコーダーの演奏を通してアンサンブルの楽しさを感得させる。

鑑賞活動を通して、いろいろな音楽に親しめるようにする。

練習から発表までの自主的な活動を通して、音楽を楽しむ心を養う。

美 術

美術の多くの分野の学習経験を通して、創作の喜びを味わい、創造的な表現力を味わう。

美術的な教養を生活に生かす態度や習慣を養い、生活を豊かにできる心を養う。

展示活動を通して自己評価させ表現意欲を出させる。

工芸製作も取り入れ、日用品を制作しそれを使う喜びを味わう。

書 道

多くの書に触れながら書の多様な表現を体験し、鑑賞力を養う。

日常生活における書の意義を考えさせ、生活に生かす態度を養う。

文字を通して表現し創作する喜びを味わう。

英 語 科

- (1) 生徒の能力を考慮して、基礎的な学力の強化に努める。
- (2) 生徒の英語学習への興味を増し、学習意欲を高めるため、指導法を研究する。
- (3) 既習教材の理解・記憶を徹底させるため適宜点検する。
- (4) 学習到達度の低い生徒については、基本的な学力を身につけるよう特に指導し、学習意欲の高い生徒については、自主的な学習を深め得るよう学習を深め得るよう学習指導上の配慮を行う。
- (5) 1年生は、習熟度別及び少人数で文法の授業を行う。

家 庭 科

- (1) 衣食住、家族、保育、高齢者、環境などに関する知識と技術を家庭経営の立場から総合的に習得させ、生活者としての自立を目指す。
- (2) 情報があふれ、めまぐるしく変化する現代社会の中で、どのようにして自分らしい生き方、暮らし方を実践していくか、主体的に生活を選びとる力を養う。
- (3) 家族、家庭、地域という身近なところから出発し、やがては世界の人々や地球環境とも相互に生き合う（共存する）力を養う。

2 学習指導方法等の研修計画

- (1) 教員として研修に努め、教材研究を行い、指導能力の向上と生徒の学習意欲に応えた充実した学習指導を行うように努力する。
- (2) 各教科ごとに、研究会を毎週定期的に関いて、進度調整、努力目標達成の具体的方法を立て、問題点について研究協議する。
- (3) 教育指導方法研修会を年1～2回開催する。
- (4) 指導技術の研修のため、研究授業を相互に行い切磋琢磨する。
- (5) 教科別年間指導計画を作成し、それに基づいた行き届いた日々の指導とともに、進展する社会情勢に対処した指導のあり方を的確に把握する。
- (6) 各教科相互の連繫を密にし、研究討議を重ね、生徒の意欲、学習向上など質的な実態把握に努める。
- (7) できる限り校外の研究会、講演会、見学会などに積極的に参加して研修に努めるとともに、他校訪問、実地見学、講師を招いての研修会の機会を作り、他校との連絡を図りつつ、本校を含めた高校教育水準の向上をめざす。

3 学習指導の改善と留年、退学の防止

自己の進路をひらいていくためには、基礎学力の充実が要件であるので、学習到達度の低い生徒については、その原因の究明に努め、教育計画との関連に留意しながら、組織的に学習到達度を高める指導に全力をあげる。

(1) 学 習 指 導

- (ア) 学習はまず本人の意欲と自覚を必要とすることから、<学ぶ>ことの意義を考えさせ、実践を通じて明確にするよう指導する。

「高校生活の手引き」を入学当初に配布、1年生には、入学後直ちにオリエンテーションを行い、高校における学習について説明する。

- (イ) 学期当初の導入には、既習事項をふまえつつ、なるべくわかりやすく、一人一人の反応を確かめつつ授業する。
- (ウ) 学習到達度の測定には、努めて平易なものを選んで実施し、平素の学習状況と結びつけて、自信をもたせるとともに、またその不十分な点について把握させる。
- (エ) 教室での平素の学習状況の観察に努め、その学習の努力を評価する。
- (オ) むりな学習目標や計画を立てず、実現可能なものにするよう指導し、生徒一人一人の学習方法の確立に向け適切なアドバイスをする。

(2) 生 活 指 導

- (ア) 「相談室」を設け、種々の悩みを気軽に相談できるようにする。
- (イ) 基本的な生活習慣の確立に努める。
- (ウ) 各ホームルームで、学習に取り組む雰囲気づくりに努める。
- (エ) 各行事において、お互いが理解しあえるように配慮する。

- (オ) できる限り、アルバイトをしないように指導する。
- (カ) 部活動に積極的に参加させることにより、その活力を学習に反映させる。
- (3) 中学校との連携
 - 出身中学との連携を密にし、中学における学習の実態の把握に努める。
 - 中高連絡会議(6月に開催し、出身中学校教員と新入生の情報交換等を行う)
 - 出身中学との個別的連携を行い、特に指導上の協議に重点をおく。
- (4) 保護者との連携
 - (ア) 保護者との連携を密にし、家庭における学習状況、その他指導について協議する。
 - 第1、第2学期中間考査後、保護者懇談会を行う。
 - (イ) その他必要に応じ、随時個人懇談を行う。
- (5) 教員間の連携
 - (ア) 各教科ごとに、年間学習指導計画を作成・点検し、問題点について討議し、適切な指導法について経験を交流する。
 - (イ) 第1、第2学期末に成績会議をもち、特に指導上留意すべき点あるいは生徒について協議し、生徒の学習実態の把握に努め、学習指導に資する。
- (6) 第3学期
 - (ア) 学習到達度の低い生徒について従来の指導を点検する。
 - (イ) 学年末の成績判定会議をひかえ、第3学期には、学習到達度の低い生徒について、特に全教科的に指導の具体的計画を立て、その指導に全力をあげる。
 - (ウ) 学年評価で欠点のある生徒には、追認考査を受けさせて進級(卒業)への手だてを講ずる。

4 年間授業日数・時数の確保についての措置

- (1) 学校週5日制の実施にともない、期末考査後も終業式まで授業を行うとともに、行事については実施形態の見直しを含めて精選するとともに、授業時数の確保に努める。
- (2) 教員の出張・休暇等、予知できる場合は振替授業を行う。
- (3) 予知できない欠課が生じた場合は、補講又は課題学習等により、生徒の学習意欲の進展を図り、学習成果の低下を防ぐ。さらに自習の心がまえ、自習時の望ましい態度を身につけさせ、具体的に自習のしかた、たとえば班別の自主的学習や、図書館を利用した学習など効果的方法を工夫し、生徒を指導する。
- (4) 3年は授業時数の確保が困難なため8月下旬に補充授業を実施する。